

— 臨床統計 —

当科における広汎子宮全摘術について

香川労災病院 産婦人科

川田 昭徳, 木下 敏史, 大倉 磯治

概要

1996年1月から2007年12月末までの香川労災病院産婦人科における子宮頸癌に対する広汎子宮全摘術の推移を報告する。当科で治療した41例を検討したところ、進行期では2b期が最も多く、続いて1b期の症例が多かった。組織型は扁平上皮癌が最も多いが腺癌系も30%認めた。出血量はBMIに比例して増加していたが、平均は850mlであった。近年術式を工夫しており、特に自律神経温存をした結果、残尿50ml以下になる日数はかなり短縮され、術後の合併症軽減に寄与していることが考えられた。

I. はじめに

当科における1996年から2007年までの広汎子宮全摘術の推移を報告する。

加傾向にあるが、特に上皮内癌の症例で増加が顕著であった。(図1)

II. 香川労災産婦人科広汎子宮全摘術統計

1. 当科における子宮頸癌進行期分布

当科における子宮頸癌新規患者数は1996年の22例から次第に増加しており、2007年は37例であった。増

2. 当科における進行期別浸潤子宮頸癌の治療

当科においては1b期では20例中19例で手術療法を施行しており、2b期になると40例中21例が手術、19例が放射線とほぼ同数であった。3期以上ではほとんど放射線療法が選択されていたが、29例中5例では術前化学療法後の手術療法が選択されていた。(図2)

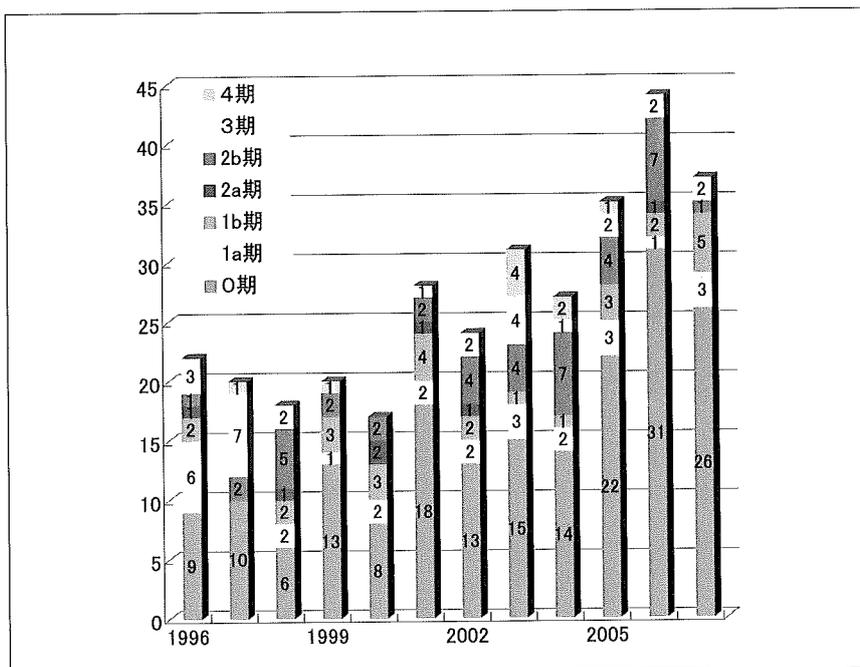


図1. 子宮頸癌進行期分布

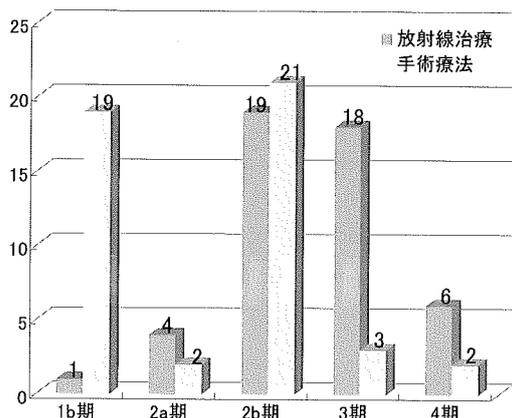


図 2. 進行期別治療法

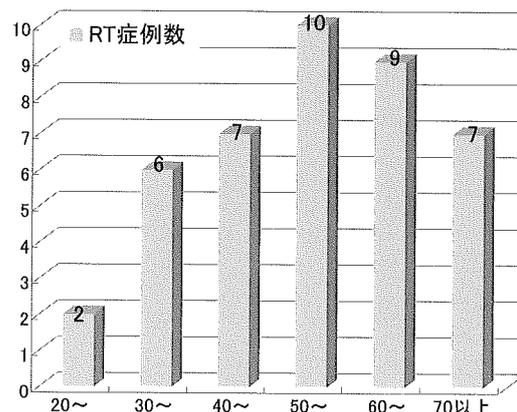


図 3. 年齢分布

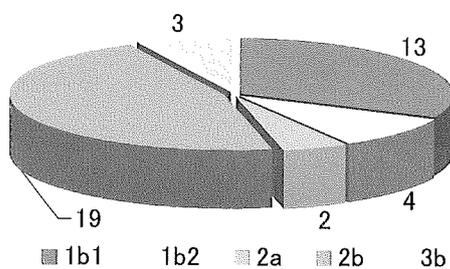


図 4. RH 症例の進行期分布

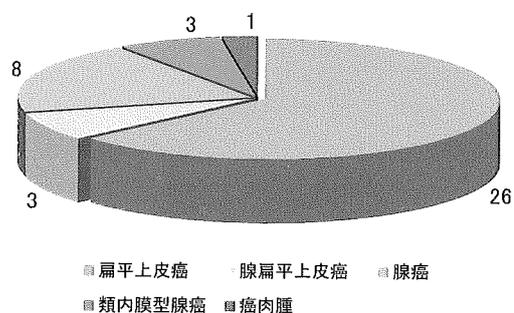


図 5. RH 症例の組織分類

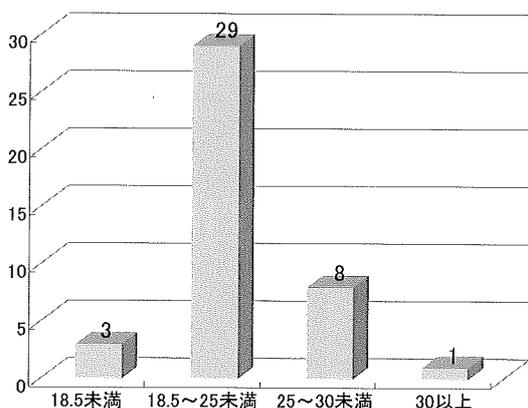


図 6. RH 症例の BMI 分布

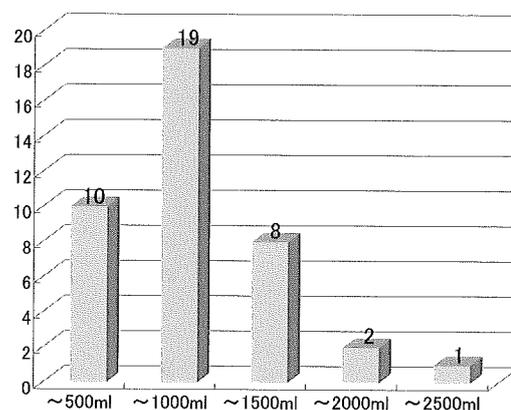


図 7. RH 症例の出血量

3. 広汎子宮全摘術症例の年齢分布

当科で施行した広汎子宮全摘術症例の平均年齢は 53.4 ± 13.9 才で 50 才代が最も多く、23 才から 76 才までで手術がなされていた。(図3)

4. 広汎子宮全摘術症例の進行期分類

当科で治療を行った計 41 例の進行期分布で最も多い

のは 2b 期の 19 例 (46.3%) であり、続いて 1b1 期の 13 例 (31.7%) であった。3b 期は 3 例あり、全て化学療法後の手術であった。(図4)

5. 広汎子宮全摘術症例の組織分類

扁平上皮癌が 41 例中 26 例 (63.4%) であり、線癌系が 13 例 (31.7%) であった。全体の割合から考えて線

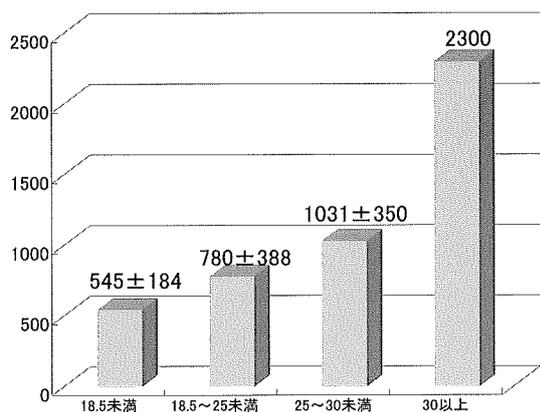


図 8. BMI と出血量

癌系の比率が高いと考えられた。(図5)

6. 広汎性子宮全摘症例の BMI 分布

BMIは平均 22.98 ± 3.28 であり、25 以上は 9 例 (22%) であった。(図 6)

7. 広汎性子宮全摘術例の出血量、輸血量

出血量は平均 $850 \pm 446\text{ml}$ で 1000ml をこえた症例は 11 例 (26.8%) であった。(図7) BMI が上昇するにつれて出血量も増える傾向にあった。(図8) 輸血に関して、当科では自己血採血しており、他家血を必要とした輸血症例は 7 例 (17.0%) であった。(表 1)

8. 広汎性子宮全摘術例の手術時間

当科における手術時間の平均は 286 ± 36 分で、最短 224 分から最長 413 分であった。

III. 当科における広汎子宮全摘の変遷

1. 術後合併症

合併症として、重複はあるが、尿管狭窄 5 例、自己導尿 4 例、感染性リンパ嚢腫 6 例、腸閉塞 5 例、肺塞栓 1 例を認めた。

2. 当科での術後合併症に対する対策

2001 年から下肢弾性ストッキング、間欠的空気加圧装置装着、2003 年リンパ節郭清部位の後腹膜の開放、2005 年骨盤自立神経温存術式の導入を行なっている。術式の工夫で、肺塞栓は 2001 年から認めず、後腹膜の開放にて大きなリンパ嚢腫の発生、リンパのう腫の感染に起因するような尿管狭窄、腸閉塞等の発生も減少した。また骨盤自律神経温存をはかった結果、残尿 50ml 以下

表 1. RH 症例の輸血量

	症例数
無輸血	4 例 (9.7%)
自己血 400ml	8 例 (19.5%)
自己血 600ml	6 例 (14.6%)
自己血 800ml	15 例 (36.6%)
他家血を含む輸血	7 例 (17.0%)

表 2. 骨盤自律神経温存術に対する改善効果

神経温存	残尿 50ml 以下の日数	p 値
無 (29)	14.9 ± 15.6 日	p = 0.058
有 (12)	5.7 ± 7.3 日	

の日数も 14.9 ± 15.6 日から 5.7 ± 7.3 日とかなり短縮された。(表 2)

V. まとめ

1. 当科で取り扱う子宮頸癌患者は増加傾向にあった。
2. 当科では積極的に自己血を利用しており、術中出血も 1000ml 以下が 70% で、他家血をふくむ輸血が行われた症例は 7 例 (17.0%) であった。
3. 経年的に術式の工夫が行われ、次第に重篤な合併症の発生は減少している傾向がみられ、QOL の改善も計る事ができていることが考えられた。

VI. 結 語

香川労災病院産婦人科における 1996 年から 2007 年までの子宮頸癌広汎子宮全摘術症例について報告した。

文 献

- 1) 日本産婦人科学会 婦人科腫瘍委員会報告 2005.5
- 2) 日本産婦人科学会 婦人科腫瘍委員会報告 2003.7
- 3) 木下敏史, 大倉磯治, 川田昭徳: 香川労災病院産婦人科子宮頸癌統計. 香川労災病院雑誌 12:193-197, 2006